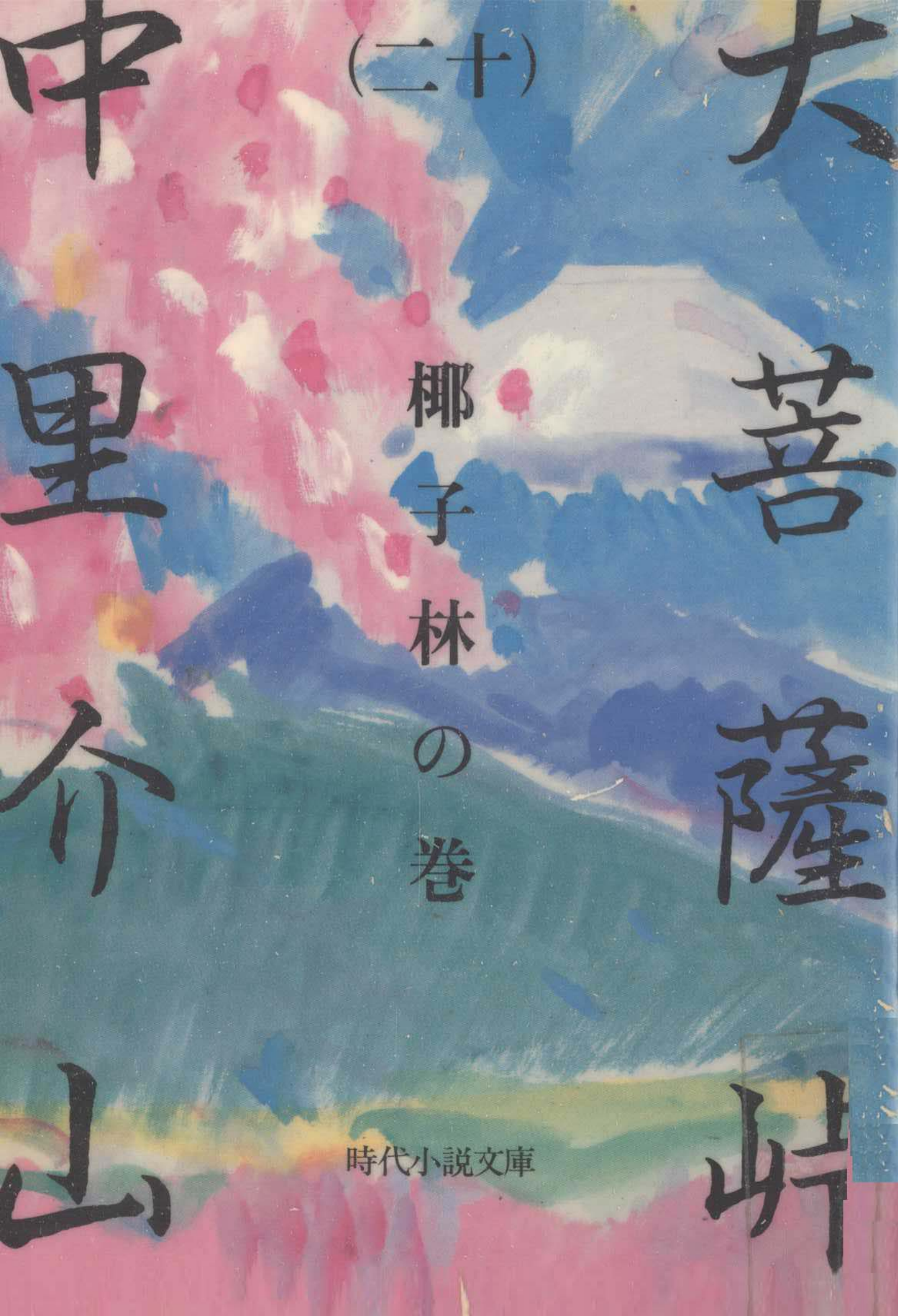




中

(二十)

大

里

椰子
林
の
巻

菩

介

薩

山

峠

時代小説文庫

時代小説文庫 20

大菩薩峠 (二十) 椰子林の巻 全二十冊

昭和五十七年十二月二十日 初版発行

著 者 中里介山

発行者 原 秀行

発行所 株式会社富士見書房

東京都千代田区富士見一―十二―十四

電話東京二六一―五三七五(代表)

千一〇二 振替東京⑦八六〇四四

印刷所 暁印刷 製本所 大谷製本

装幀者 熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-600120-7440(0)

時代小説文庫

20



富士見書房

大菩薩峠

(二十)

椰子林の巻 中里介山

目次

山科の巻(つづき)

七

椰子林の巻

一五

『大菩薩峠』未完の問題

伊藤和也 四六

『大菩薩峠』の「お杉・お玉」

原田伴彦 四二

介山の平等観

尾崎秀樹 四四

大菩薩峠

(二十)

椰子林の巻

山科の巻（つづき）

四六

これらの会話に花が咲いているところに、いつかは知らず、一人加わり、二人加わり、火鉢の周囲が五七人の人で囲まれて、いとど活気が炭火とともに燃え上りました。

その連中も、いずれ御多分に洩れぬ壮士浪士、ただし新選組でもなし、御陵隊でもなし、有籍の諸藩士、無籍の修行人でもなし、いずれも、フリーランサーであるに相違ないと思われる。フリーランサーは英語であって、当時日本の流行語で言えば、脱走者とも、脱藩人とも言う。

つまり、諸藩を脱走して、各々その懐抱（かいほう）するイデオロギーによって自由行動をとる、当時の志ある青年武士である。藩籍にあって知行をいただいている自由の行動が取れない、よし自由の行動が取れるにしても、その行動が藩主の身上に影響を及ぼすところをおそれ、好んで藩を脱して諸国を放浪して、大言壮語することを職としていた筋目の通る溢れ者が、当時の社会には充ち満ちておりました。

期せずして、これらのものが会見して、語り出す日になると談論風発です。天下国家のことか

ら、経世済民のことから、人物汝南じよなんのことから、尊王討幕のことから、攘夷清掃じよういのことに及んで、いつも火の出るような言論戦が行われることは当り前であるが、今日は、話のきっかけが見て来た修羅場のことから始まり、その内容の叙述について、もはや、かなりの弁論時間を要したものですから、架空の議論には及ぶ余暇がなかったのですが、ここで右の叙景談が一応終りを告げると、次に猛然として湧き起るのは、天下国家の談論風発であることは是非もないことです。

「一たい、天下の形勢はどうなるんだ」

「維新いしんというのは一体何を意味するんだ」

この大たいの問題が、まだ明答を与えられていない。寄るとさわると、天下の形勢は如何いかん、維新の意義は如何いかんということが、口癖になつてゐることほど、何人も天下の形勢に不安を感じ、維新の必要を信じてゐる。天下の形勢がかく不安なればこそ、維新の必要が当然であつて、維新なきにおいては天下の不安が救われないということは、児童走卒せうそうまでもこれを信じながら、さて、では今の天下の形勢がドコへ落着いて、維新の新体制はどう組織されるのだという具体観になつてみると、識者といえどもこれが明断を下し、明答を与えることが出来ない。

そこで、右等の壮士連も、天下国家の談に及ぼうとする最初の出立は、ここからはじまるのです。

古くして新しいのは、新しく解釈せらるべくして、現在維持の底力が動かないからです。

「いや、天下の形勢も古いものだが、落着く筋道は大ていわかっている、ただ、その筋道が一筋でない、幾筋があるので迷つてゐるだけのものだ、落着くということになれば、ドレかそのう

ちの一つに落着く」

「は、は、は」

誰かが高らかに笑いました。

「落着くところに落着くという結論は、成るようにしか成らぬという論理と同じことなんだ、成行き任せに手を拱きょうしていることが出来ない、落着くべきところに事物を落着かせ、成るべきように国家を成らしめんがためにこそ、我々は身命を顧みず東奔西走しているのだ」

「それはまた至極同感である、同感であるというのは、感服という意味ではない、その意見も、要領を得たようで、要領を得ないことは前者と同じである、すなわち、問題は落着くべきところに物を落着かせるという、その落着くべきところはドコなんだ、成るべきように国家を成らしむという、その成らしむる究竟きゆうきよう目的きよくというものを、諸君ははつきりと指示が出来るのか——」

肯定と、否定とを、同時にして究竟問題を提出した一人の壮士、それを判者面はんじやがおの南条力が、

「君たちは定義を先に立てておいて、弁証を後にするから、それでいたずらに抽象に走はせて、意余りあって情が尽くせないことになるのだ、冷静な逐条審議ちくじょうしんぎから出直して見給え、当世流行の科学的という奴で……」

「なるほど、細目を上げて、しかして大綱たいこうに及ぶという帰納論法をとってみるほうが、斯様なときにはわかりが早いかも知れぬ」

「では……」

南条が咳せきばらいをして、

「いいかい、では、その落着くべきところ、という命題をまず、とっつかまえて俎まいたにのぼす——その落着くべき筋道が幾筋もあるということを、さいぜん北山君が言ったが、単に幾筋もあるではないけない、それでは当世流行の科学的ということにならないから、幾筋なんぞとぼかさずに、五筋なら五筋、六筋なら六筋と明確に数を挙げてもらいたい、これも当世流行の数学的という奴で、つまり、昔の塵劫記じんこくきでゆくのだ」

「そう言われると、そうだなあ、その落着くべき道というのが幾筋あるかなあ」

正直な北山は、注文をまともに、あれかこれかと胸算用むなざんようをはじめて、急には埒うちが明かないのを南条が突っこんで、

「胸算用はやめて、まず、頭に浮かんだ一筋ずつを言ってみて見給え、そうして、一筋ずつ抽き出して、抽き尽くした後に寄せ算をしてみれば容易たやすくして委しい」

「君は算者さんじやだ」

北山は、南条の頭のよさに敬服する、南条の頭がいいのではない、自分の頭が鈍に過ぎるのだ、と申し訳たたらで、勧告されたとおりに、逐条列举に思考を換え、

「まず、今の天下が落着くべき筋道としては——例を挙げてみるのだよ、そこに落着くのが正しいとか、そこに落着きそうだとかいうの判定ではないよ、例を幾つも挙げてみるんだから、これが拙者の希望であり、意見であるように取られては困るよ」

「そんな申し訳はせんでもいい、早く第一条を言い給え」

「まず、今までどおり徳川の天下に安定するというのが最初の筋道として」

「次は」

「幕府が政權を朝廷に返し奉る、王政復古の筋道」

「次は」

「王政復古が成らずして、畏くも建武の古例を繰り返すような事態が到来したとして、いや、そうでなくとも、徳川幕府につづく第二第三の幕府が出来るとしてみると」

「徳川幕府以外の幕府の成立を予想してみる、なるほど」

更に第四条件にうつろうとする時、横合いから口を出し石井権堂というのが、

「その科学的とやら数学的とやらいうところを、もう一層細かく、単に徳川幕府以外の幕府が、成立とか何とかの仮定条件では物足りない、徳川幕府に代る幕府が成立するとすれば、誰が代るか、それを一つ具体的に言ってみてもらいたいな」

「まず、薩摩か」

「まず、長州か」

「毛利だろう」

「島津だろう」

この二つは動かない、誰も、それを上下したり、左右にしたりして見ることはするが、それ以外のものを加えてみようとはしない。

そこで、この席には、薩州論と長州論との談論の枝が出て、その枝がかんじんの話題の幹よりも大きく、広くなりそうで、長と、薩と、徳川家との関係から、関ヶ原以来の歴史にまで遡った

り、人物はドチラにいる、いや薩が断然^{とつと}抜けているという者もあれば、どうして長のほうが粒^{こま}が揃^{そろ}っているというものがある、そういうことで談論が鋭化し、感情が昂進して、折角の科学的も、数学的もケン飛んで、鉄拳が飛びかねまじき勢いでしたが、座長格の南条がようやく取りしずめて、

「してみると、徳川幕府倒れて、新たに、將軍職を襲うものがありとすれば、これは薩州か、長州かのいずれかより起る、その判断には異議はないか」

「異議がないようだ」

「だが、ここになお一つの勢力、お公家さんにもエライのがいるぞ、中山卿^{きやう}だの、三条殿、死んだ姉小路——岩倉——大名ばかりを見ていては見る目が偏るぞ」

とさしはさむものがあるかと思うと、一方には、

「いや、まだ大名のうちにも油断のならぬのがいるぞ、土佐、肥前なんぞは、なかなか食えないぞ」

と言う者もありました。

四十七

「土佐は食えない」

と和するものがあって、薩長論から続いて話壇を占有したものは土佐でありました。

「土佐の国の国論というものは一種不可思議だよ、志は王政の復古にあらず、さりとして幕政の

現状維持でもない、どの道、天下は一大改革をせにやならんということは心得ているらしいが、その方法として封建を改めて郡県を立てんとするの意思も相当徹底しているらしいが、それはよろしいが、その手段方策というものが土佐一流で、徳川慶喜をして大政を奉還せしめる、これも異議がない、しかして大政を奉還せしめた後、天下の公卿諸大名から、各藩の英才を徴して新政に参与せしめる、その理想も悪くはないが、さて、その新政体の主脳髓は何という段になると、それが今の慶喜を將軍職を奉還せしめた後、改めて政権の主座に置いて、三百諸侯皆現状維持の下に、つまり藩主を藩知事というものににして、それで、現状維持のままに政を一新せしめてゆくという案らしい、それが、無用の破綻と、摩擦を起さずして、しかして体制を一変し、新政の実を挙ぐるに最も妙用であると、土佐ではそう考えているらしい、そういうような意見と、運動が一藩の輿論となつてゐるらしい、それだといふといふゆる、公武合体のような有りふれた妥協でもないし、一面は一新の革新意識に触れてゐるし、一面は旧制度の保守にも通じてゐる、ちょっと、まともに反対しようがあるまい、この一藩の輿論の下に、土佐はまず幕府に向かって大政奉還運動を働きかけてゐる、徳川氏に向かって、早く、政権を朝廷に向けて奉還せよ、それが天下の大勢であるし、また徳川氏の社稷を保つ最も賢明の方針だ、大政奉還が一刻早ければ早いだけの効能がある、一刻遅ければ遅いだけの損失がある、ということ、あの藩の策士どもはしきりに幕府に向かって建議勧誘してゐるそうだ」

「それは利くまい、三百年來の徳川政権を無条件で奉還する、いくら、内憂外患頻発の世の中とはいへ、一戦も交えずして、政権を奉還する、そんなことは將軍職としてやれまい、將軍職と

してはやれても、臣下が肯ずるといふことはあるまい、夢だ、空想だ、策士の策倒れだよ」

「ところが、存外、それが手ごたえがありそうだといふことだ、幕府も大いに意が動いているらしいといふことだ、何しても、もはや徳川幕府では、この時局担当の任に堪え得られない、よき転換の方法があれば、早く転換するのが賢いという見通しは、こと、今日に至っては、いかに鈍感なりといえども、気がついていないはずはあるまい、よって、存外、土佐の建策が成功するかもしれない」

「そんなことは痴人の夢だよ、天下の幕府でなく、一藩の大名にしてからが、藩政が行き詰まったから大名をやめます、藩主の地位を奉還しますとは誰にも言えまい、取るに足らぬ一家にしかたってそうじゃないか、見す見す家をつぶすといふことが、一家の主人としても、オイソレとはやれない、幕府の無条件大政奉還などといふことは、いくら時勢が行き詰まったって、これは夢だよ、それこそ書生の空論だよ、今の時勢だから、書生の空論も、一藩の輿論を制する、といふことは出来ない限りもあるまいが、天下の大権を動かそうなどとは、それは痴人の夢だ」

「ところが、存外、痴人の夢でないといふことを、僕はある方面から確聞いた、それに大政奉還は徳川の家をつぶす所以ゆえんでなく、これを活かす最も有効の手段だといふことなんだ、そこに、徳川家と土佐とは、ある默契が通っているらしい、大政奉還將軍職辞退の名を取って、事実、新政体の主座には、やっぱり慶喜を置く、そうして天下を動揺せしめずして新政体を作る、というのが眼目になっているらしいから、そこで、幕府も相当乗り気になっているらしい、つまり名を捨てて実を取る、名を捨てることによって時代の人心を緩和する、実を取ることによって、や

っぱり徳川家が組織の主班である、多少、末梢まつしょうのところには動揺轉換はあるにしても、根幹は変わらないで、しかも、効を奏すれば、時代の陰悪な空気をこれで一掃することが出来る、至極の妙案だと、乗り気になって動き出したものが幕府側にもあるということだ」

「ふーん、してみると、坂本や後藤一輩の書生空論によって、天下の大勢が急角度の轉換をする、万一、それが成功したら、また一つの見物みものには相違ないが、同時に徳川家を擁する土佐の勢力というものが、俄然がぜんとして頭をもたげてくることになる、慶喜を総裁として、容堂が副総裁ということにでもなるのか」

「いや、それが成功したからとて、一途に土佐が時を得るというわけにはまいるまい」

「失敗しても、土佐は得るところがあつて、失うところはないのだ」

「だが、諸君、心配し給うな、そんな改革が、仮に実行されるとしてみても、成功するはずがないから、心配し給うな」

「どうして」

「たとえばだ、君たち、ここに拙者が坐ったままでいて、そうして、この畳の表替えをしると言つたところで、それは出来まい、畳の表替えをしようというには、そこに坐っている者から座を立たねばならぬ、坐っている奴が、座を立つことをお、つ、く、う、が、つて、このまま表替えをしると言つたつてそりゃあ無理だ、家の建替えや根つぎにしてからがそうだろう、天下のことにおいてはお更だ、攻撃をする、改造をするという時に、中に人間どもが旧態依然としてのさばつていて、それで改造や改築が出来るか、現状維持をやりながら維新、革新をやろうとしたつて、そり